

〔國花萬葉記山城〕雜菜之品

竹筍 真竹也

醍醐 八幡

〔古事記上〕於是伊邪那岐命見畏而逃還之時、其妹伊邪那美命言令見辱吾即遣豫母都志許賣此六
音令追爾伊邪那岐命略中刺其右御美豆良之湯津津間櫛引闕而投棄乃生筍是拔食之間逃行、
〔古事記傳六〕筍は字鏡に筍筍太加牟奈とあり、後の物に多加字奈とも云り、凡て字と云なす例多し、音便なり、名の意は竹芽タカノ
ナ菜なり、菜は食に添て喰物の凡の名なり、歌には竹子と云故に、歌には竹子と云ふのみよめり、此は拔食の名をたかむなど、
〔出雲風土記秋鹿郡〕都勢野山略中筍茅等物叢生、

〔續修東大寺正倉院文書別集十九〕奉寫一切經所解 申請用雜物事

合請新錢廿三貫九百九十三文略中

用一十七貫五百六十文略中

五十文竹子二束直束別廿五文

以前起去閏三月一日、盡今月廿九日、請用雜物并殘等、顯注如件以解、

寶龜二年五月廿九日

散位正六位上上村主馬養署名略○以下

〔日本靈異記下〕觸體目穴筍揭脫以祈之示靈表緣第廿七

白壁天皇仁光世寶龜九年戊午冬十二月下旬備後國葦田郡大山里人品知牧人爲買正月物、向同國深津郡於深津市而往、中路日晚、次葦田郡於葦田竹原所宿之處有呻音言痛目矣、牧人聞之、竟夜不寢而踞、明日見之有一觸體筍生目穴而所串之揭竹解免自所食餉以饗之言吾令得福到市買物、每買如意、疑彼觸體因祈報恩矣、

〔延喜式三十〕造雜物法

筍子一圍擇得二升料、鹽九合、搗糟三升、右釋奠料

〔延喜式三十九〕供奉雜菜

日別一斗○中第四把五六中宮准此、其東宮雜菜五升略中第二把、